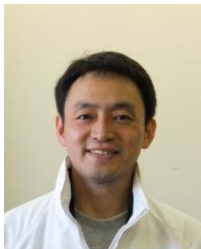


学会企画シンポジウム

アスリート育成の未来

司会：西川大輔 准教授（体育学科）



オリンピックソウル大会（1988年）およびバルセロナ大会（1992年）の2大会で体操競技団体3位を獲得。日本大学大学院を卒業後、日本大学芸術学部を経て、現在、文理学部に勤務。主な担当科目は、器械運動、コーチング論および体操方法論。平成12年から現在に至るまで保健体育審議会体操部コーチとして多くの選手を育成している。また、NHK放送（平成14-15年世界体操競技選手権大会など）の解説では、その分かりやすさに定評がある。大阪府出身。

シンポジスト：

松本恵 准教授（体育学科）



藤女子大学助手、北海道大学特任助教、サウスオーストラリア大学客員研究員を経て2011年春より現職。高校生まで競泳選手をしていた経験を生かし、運動と食事の組み合わせによる健康増進を目指して研究活動を行ってきた。冬期スポーツや水泳・トライアスロン選手の栄養サポートに携わる。2008年度よりNTC大倉山医科学サポートチームに所属し、スキージャンプ選手のトップジュニアから女子、シニア選手の栄養指導を担当。北海道出身。

小山貴之 専任講師（体育学科）



1999年、東京都立医療技術短期大学理学療法学科を卒業後、駿河台日本大学病院理学療法室にて勤務し、スポーツ外傷・障害後のリハビリテーションを担当。2006年に東京都立保健科学大学大学院修士課程、2009年に首都大学東京大学院博士後期課程を修了した（学位：理学療法学博士）。2010年4月より現職となり、アメリカンフットボール部フェニックストレーナーも務めている。理学療法士ならびに日本体育協会公認アスレティックトレーナー。

竹俣壽郎（公益財団法人日本オリンピック委員会）



2006年よりJOCの強化スタッフ。2007年JOCナショナルコーチアカデミーを修了し、専任コーチングディレクター（NTC担当）として従事。NTC内でウエイトリフティング競技のナショナル・ジュニアトップ選手の指導に当たる。また、2010年国立スポーツ科学センターからの委嘱を受け、プロジェクト研究（身体運動及び人間・用具・環境系の挙動の最適化に関する研究）に参画。（社）日本ウエイトリフティング協会選手強化委員、指導者育成委員、医・科学委員。

【要旨】

近年、多くのスポーツ競技の現場で、スポーツ科学に関するより専門的知識が競技力向上のために役立てられています。特に、トレーニングについてはトレーニング理論に基づいた様々なトレーニング法が開発され、それぞれの競技特性に応じた専門的トレーニング

に活用されています。同時に、さらに効果的なトレーニング方法の開発を目指してより高度なスポーツ科学の研究が多角的に進められています。

しかしながら、どんなに有効といわれるトレーニングを積んだ選手であっても、実際の試合でその実力を十分発揮できるかどうかは、正直なところ誰にも正確に予測することはできません。つまり、コンディショニングに関していえば、スポーツ科学はまだ発展途上といえるかもしれませんし、あるいは、実際の現場ではスポーツ科学の知見を十分生かし切れていないのかもしれません。

そこで、良いパフォーマンスを発揮するために、どのようなコンディショニングをすべきか、スポーツ科学の様々な観点に立って、改めてコンディショニングを考えることが重要と考えました。また、選手や指導者として、あるいは競技力向上をサポートする研究者として、コンディショニングの知識を多くの分野から得ることは、今後のスポーツ現場にあるヒントを与えかもしれません。そんな身近な問題を少しでも解決できることを期待して、今回のシンポジウムを企画しました。

はじめに、司会の西川先生からこのシンポジウムの趣旨を説明していただき、これまでの体操競技選手や指導者としての実績を踏まえ、体操競技におけるコーチング現場についてお話ししました。続いて、スポーツ栄養学の立場から松本先生より、育成期の栄養教育の重要性と、個人の選手に合わせたサポートの充実ならびにスポーツ栄養士のできることに ついて、また、小山先生より、フィットネス・トレーニングとリハビリテーションの立場から、コンディショニングに関わる最新の考え方をご紹介いただきました。さらに竹俣氏より、ナショナルトレーニングセンターの取り組みや国立スポーツ科学センターとの連携について具体的にお話しいただきました。その他、これまで実践されてきた研究や、アスリート育成に際して今後想定される課題やスポーツ科学による貢献について、貴重なお話を していただきました。

